

一 忘れてならぬ聞法の態度

聽聞は如來の慈悲を領得する唯一の便法である。既に人生に驚き、自己に目覺め、求道の旅にある者、須らく心を空虛にして、如來の教法に全心を耳傾けねばならぬ。唯夫れ「聽聞を心に入れ申さば、お慈悲にて候間信を得べきなり」。「佛法は大切に求むるより聞く者なり」。而してその聞かや「何も同じ様に聞かで、聽かば角をきけ、詮あるところを聽け、一つことを幾度聽聞申すとも、珍しく初めたるやうにあるべきなり」とは、是れ蓮如上人の御訓言。

他力の宗教では、この聽聞といふことが、非常に重ぜられてある。「聞かといふは信心をあらはすみのりなり」といふ、祖師の言さへあつて、その聽聞は汎爾のものでなく、眞劍に徹底したものでなくてはならぬ。「聞かといふは衆生、佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、之を聞かといふ」とは千古不磨の斷案である。従つて「聞其名號」は即ち「信心歡喜」であつて、聞即信と云へる。されば聞に就て、三種を大別することが出来る。曰く信前、曰く信當體、曰く信後。一は信仰に至るまでの汎爾の聞様にして、二は善知識の言の聞えた下に、歸命の一念發得したのを云ひ、三は後念相續の厭足なきものである。

天保八年の大飢饉に、京阪の地多く飢餓に迫る者あり。大阪の富家慈心深くして、毎日施米し、毎夜粥を煮いて車に積み、自ら粥やらうくと呼び歩く。而して同じその聲を聞き乍ら、氣質境遇に因つて聞様色々に分る。「粥遣らう聲を子供の添寝哉」。自分が飢て居ないから貰ふ心がなく、却つて道具に使ひ冷笑して居る。地獄ときいてはクス／＼笑ひ出し、極樂と聞いてはソク／＼逃げ出す。「粥やらう聲聞きながら遠慮する」。空腹はある貰ひたうはあ

る又耻またはづかしうもある。我身わがみの一大事だいじが氣きに懸かり、聞きいてみたうもあり耻はづかしうもある。出でたり引ひ込んだりの間ま分ぶん際さい。「粥かゆやらう聲こゑは空そら吹ふく風かぜの音おと」。慈じ悲ひ深い人ひとよ結構けつこうの事ことよと聞ききはすれど、貫もつふ心こゝろも施ほす心こゝろも起おこらぬ。御お慈じ悲ひはたいせつ大たい切せつと聞きけど受うくる氣きも起おこらぬ聞き知ち分ぶん際さい。「粥かゆやらう聲こゑをたのむや飢かつ人びと」。我わが身みの飢ひも餓じ淺あ間ましさに矢やも楯たてもたまらず、遣やらう助たすけう聲こゑに飛と出びだして、たのみになつたが聞もん即そく信しんの一念ねん。「粥かゆやらう聲こゑきいたまゝあとの味あじ」。お慈じ悲ひの粥かゆに腹はらがふくれて、嬉うれし辱かたじけななの信しん後ご相さう續ぞく。斯か様やうに五だん段だんを分わかつことが出で來きる。扱さて私わたくし供どもは孰いづれに相さう當たうするであらうか。

「虚むなく往ゆきて實みちて歸かへれ」空から手でに來きたりて實じつをも持かへち歸かへれ。身しん心しん脫とつ落らく、脫とつ落らく身しん心しん。自身わがみは現げんに是これ罪ざい惡あく生しやう死じの凡ぼん夫ぶ、とも地ち獄ごくは一いち定ぢやうすみかぞかしと、脫とつ落らくしきつて、空から手でになつた處ところ、そこに大だい法ほふの聲こゑは聞きえて下くださるのである。『四十華け嚴げん經ぎやう』に曰いはく「寧むしろ惡あく道だうにて多た劫こふの苦くるみを受うけるとも、佛ぶつ名みやうを聞きかん。善ぜん道だうに生しやうずるも、暫さん時じも佛ほとけを聞きかざることを願ねがはず」と。餅もちを頬ほ張ちやうつた上うへに、尙なほ菓くわ子しをねぢこむことは出で來きぬ。至し心しん信しん樂げう己おのれを忘わすれてとは、正まに是これ。